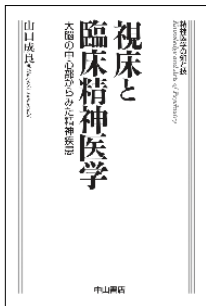


■ 書 評



視床と臨床精神医学
—大脳を中心部からみた精神疾患—

山口成良 著
中山書店 2013年2月
186頁 定価 3,990円

われわれは大脳を中心部に、一對の卵型をした灰白質の塊を持っている。視床である。大脳の扇の要に位置するこの巨大な神経核群は、感覚の中継核としての役割のみならず、多彩な脳機能に関与することが明らかにされている。すなわち、視床は、嗅覚を除くすべての感覚情報処理のほか、錐体路系および錐体外路系にも関与し、大脳辺縁系および上行性賦活系の一部であると同時に皮質連合野とも線維連絡を持っている。したがって視床の損傷によって、感覚や運動の障害に加えて、覚醒、注意、気分、記憶、言語、抽象化などの神経心理学的機能に障害が生じ得ることが知られている。「視床」を冠する症候には、広く知られている視床痛のほかに、高次脳機能障害として視床性 neglect (半側空間無視)、視床性 chronotaxis (時間見当識の限局性障害)、視床性健忘、視床性失語、視床性認知症などがあり、実験的には視床性睡眠の存在も知られている。

中山書店による「精神医学の知と技」シリーズは、本邦の顕学の手になる好著を次々と刊行しており、目が離せない存在になりつつある。今回、同シリーズに本書が加わったことは、著者が精神医学に果たしてこられた多大な貢献を顧みるとき、必然の成り行きと言えらるであろう。すなわち、本書は、汎性視床皮質投射系研究の世界的権威である著者が、長年にわたって取り組まれた視床の神経生理学的研究を基礎に、視床と臨床精神医学との関連についてまとめられたものである。同じ著者による「視床と精神医学—汎性視床皮質投射系の役割」(2004年、医学書院)では、動物実験に関する記述が半数近い頁を占めていたのに対して、本書ではより臨床との関連に比重が置かれて

いる。本書の目次を辿ると、序章「視床の解剖学的・生理学的概説」に始まり、第1章以下、「意識と視床」、「睡眠・覚醒と視床」、「てんかんと視床」、「高次神経機能(言語、認知、記憶、知能)と視床」、「Creutzfeldt-Jakob病と視床」と続き、最終第6章「内因性精神障害(とくに統合失調症と気分障害)と視床」に至る構成である。視床の複雑な機能の理解を助ける解剖学的模式図が随所に適切に挿入されていることはもちろん、症例の組織病理図、脳波図、脳MRI画像、functional MRI画像、PET画像なども豊富に掲載されており、興味深く読み進むことができる。

評者は特に、Creutzfeldt-Jakob病における視床病変には系統発生学的序列が反映され、発生学的に新しい神経核がより脆弱である、という知見が繰り返して紹介されている点に興味を引かれた。発生学的見地から神経細胞の脆弱性を考察する視点は、神経病理学的アプローチの主流が蓄積タンパク質および関連する遺伝子異常に傾倒している現況の中で、新鮮な印象を与える。とりわけ視床枕(pulvinar)は、系統発生学的にヒトにおいて最高度に発達した部位であり、皮質連合野との密接な線維連絡も明らかにされている。視床枕は精神症状で初発する変異型Creutzfeldt-Jakob病で特徴的画像変化が認められる部位であるが(pulvinar sign)、統合失調症患者で視床枕の有意な体積減少が認められることも紹介されている。もちろん、統合失調症と視床とを関連付ける仮説として著者は、ノーベル賞受賞者 Carlsson の「視床フィルター機能不全説」や Andreasen の「皮質-小脳-視床-皮質サーキット機能不全に基づく cognitive dysmetria 説」にも言及している。

評者は、精神医学者や神経学者のみならず、広く臨床医や医学生が本書を手に取り、脳とことろについての理解を深めることを期待したい。とりわけ将来、精神医学、神経内科学、脳神経外科学、神経放射線医学などの分野を志す若い研修医や医学生には、本書を通して単に知識の習得に止まらず、臨床医であり脳科学者である著者が歩んでこられた Physician-Scientist の道程がいかなるものか、是非その奥行の深さを感じ取っていただきたい。

(布村明彦)